

2005. 9月号

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 11

2005年 9月29日

第11回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. 「アテネから1年、引退して今思うこと」	
ゲスト：武田美保氏 _____	1
2. 第12回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会	
アンケート集計結果 _____	6
2005年9月29日 勉強会参加者一覧 _____	9
次回勉強会スケジュール _____	10

**第11回目の勉強会は武田美保氏をゲストにお迎えしお話しいただきました。
今回から勉強会の内容を本勉強会・主宰の田中の考察という形でまとめてご報告いたします。**

今回のゲストはシンクロオリンピック銀メダリストの武田美保さん。前回の11回目、これまでの10回分の総まとめをしてからの初めてのゲストだ。

私にとっては、1994年からナショナルコーチとして武田美保さんのことは選手として知っているし、今では一緒に仕事をすることも多いので、武田さん、とは少々呼びにくい・・・。「タケちゃん」と書かせていただきたい。

勉強会では、通常、ゲストの方の幼少の頃からの話を順を追って伺うが、今回は、まずはアテネでのまだ記憶に新しいデュエット演技を皆様にももう一度見て頂こうと、ビデオ上映した。

どんなスポーツも過酷であることには違いない。タケちゃんは、改めて自分の演技を見て、「自分にとってシンクロというのは、極限のスポーツだったと思う。」と振り返った。そもそもシンクロの演技は、大会用の振り付けを作り終えて、初めて演じ終わった時には、失神するほど過酷なもの。華やかさの影で失神するほどの過酷な演技を、より簡単にやっているように見せられるまで、練習することによって、初めて大会で披露できるものだ。私もそんな自分の現役時代を思い出した。

くだらない話で恐縮だが、あまりに苦しくて、逆さまの姿勢になりながら頭が水中に入っている時に、「うろう」と唸ってしまったり、あまりに辛くてノーズクリップ（鼻栓）が飛んでいきそうなくらいである・・・。

そんな苦しい競技生活からの引退は、どういう決断からだったのか。なぜ引退したのか。本題に入った。

<引退について>

「引退するという事は、簡単な決断でした」

タケちゃんは、はっきりとそう言った。

「20年もやってきたので、もう少し感慨深くなるのかと思っていましたが、迷わずすっぱりと決める事ができました」とのこと。

言いにくい話ではあるが、タケちゃんは立花美哉さんとのデュエットで最後のアテネでは金メダルを取ることが目標だった。でも結果は銀メダル。「メダルの色は自分の望む色ではなかったのに、なぜそんなにきっぱりと決められたのかな？」答えはわかっていたが聞いてみた。

「もちろん選手だし、オリンピックに出るからには、金メダルという意識はあったけれど、金メダルよりも、自分が満足できるシンクロということを目標にしていました。

アテネオリンピックのときは、最後の音楽が鳴り終わった時、「これでやめられる！」と思ったんです。」

「演技のときは、自分の思うように体も動いて、お互いを感じて泳ぐことができました。そもそも1996年のアトランタではチームのみが正式種目で、そのときは銅メダル。このときのメダルは、自分の力でとったというより、他の人の力（コーチやスタッフ）でとらせてもらったという気持ちが強かったので、このタイミングでの引退は全く考えていなかった・・・。仮にメダルの色が違っていても（たと

え金や銀だったとしても)、当時は辞めるつもりはなかったと思います。」

つまり、彼女が言いたいことは、「自分の満足のいく演技」ができたかできないかで、納得度が違うということ。それは多少極端に言えば、メダルの色とは関係ないところでの判断ということ。

彼女は、初めてのオリンピックであった96年のアトランタでは、まったく選手としても未熟であったと振り返る。練習などはコーチからの「やらされ感」があったり、厳しい練習は、嫌々ながらおこなっていたという。それが2000年のシドニー、2004年のアテネと時を重ねるたび、意識が変わっていったのだという。

「井村監督に、アトランタでのチーム決勝で銅メダルを取ったその夜の夜に呼ばれたんです。集合がかかって、みんな呼ばれて。『この中で本当に自分の力でメダルが取れたと思う人は誰だ』と先生に聞かれました。そして『この中の何人かは、メダルを返さなければいけないはずだ』と。当然、自分はその一人だと思いました。自分で取れたという気はしていなかったんです。メダリストとしての資格がないというような。」

<お母様の影響>

もともとジュニアの頃から、練習では毎回テーマを決めて取り組むことが好きだった。ひとつひとつの動作に対し、どのようにやれば一番うまくやることができるか、毎回違う方法で納得するまで試したりした。そういった練習姿勢はおそらくお母様の影響もあるのではないかと推測する。タケちゃん自身もお母様からの影響は大きかったと振り返る。お母様とは小さいころから練習や試合の後などに、その日の演技を振り返って、どうすればもっとよく出来るかということについて話をしたそう。

「母は非常にポジティブな考え方の持ち主で、試合などで失敗した夜など、『美保、そのミスは今後どうしたら活かせるか考えなさい。そうすれば今日のミスは成功への糧となるのだから。』と前向きなアドバイスをしてくれました。考えてみれば、このころから自然と自己分析みたいなことはしていたのかもしれないですね。」

タケちゃんは、よく内省をする人だ。

起きた状況や結果に対して、「なぜそうなったんだ」「自分はどう感じているのか」「なぜそう感じているのか」「周囲はなぜそう思うのか」様々な側面から考える人である。

どんなこともそういった内省を通して、ポジティブに、というか、論理的に自分のプラスになるように捉えていって、結果を出していく、ということが続けていたのだろう。

お母様にまつわるエピソードとして非常に興味深いものがある。

「10代半ばぐらいで、徐々に先輩に勝つようになった頃、いじめとは言わないけれど、皮肉や嫌がらせを受けることがありました。それを母に相談したところ、『それは、あなたが、今はまだ先輩に勝ったり負けたりという曖昧な位置にいるからよ。もっとがんばりなさい。全く手が届かないところまで突き抜けなさい。そうしたら、だれもそのような事は言わなくなるから』とアドバイスを受けたことがあります。素直にそうだ、と思いましたね。」

これを真のポジティブ思考とよぶ。

でもまだまだジュニアの時から、本当に内省をしながら、競技を続けてきていたのだろうか。何か大きな節目があったのではないだろうか。

<15歳の頃の話>

「15歳の時なんですけど。ジュニアの世界選手権で、日本チームのファーストソロとして出場したのですが、予選で日本のセカンドソロの人に負けてしまい、決勝に進めなかったことがあったんです。（ファーストソロは日本で選考会では上位にいた選手なので、通常はファーストソロが決勝に行く）

このときは、セカンドソロの人にとにかく負けたくないという一心で、相手ばかりを見てしまい、結果的に、自分の演技に集中できなかつたんです。この試合の後に、はじめて自分がうまくいったときと、今回は何が違ったのかという分析をしました。そして、相手がどうこうではなく、『自分のもてる力を100%出すように集中する事が重要』と悟ったんです。」

15歳で、もうそこに気づいたとは。

外的な集中では勝てない。内的な集中をし続けることが最も重要。勝つべき人間は他人ではなく自分自身。そこに気づいたという。これは競技者としては非常に大きな節目だ。

<デュエット>

1997年より立花さんとデュエットを組んだ。当時すでにソロ優勝者であった立花さんとのペアを「自分ではあり得ないペア」だと思ったそうだ。

身長差だけでなく、手足の形も、身体のタイプも違う。性格も違う……。とにかく何を取っても正反対の2人だった。だから、デュエットを組み始めたころは、どのように振りを合わせていけばいいのかをつかめないうまま演技をしていたという。

しかし、引退間近の数年間練習の中で、お互いのできることでできないことを突きつけ合って切磋琢磨し、選手として、デュエットパートナーとして力をつけていった。

<引退後>

引退して1年。去る7月には、世界水泳モントリオール大会にテレビの仕事で行った。初めてシンクロの試合を外側（観客席）から見るという経験をした。

「観客席で練習や予選の様々を見てみると、どこの国のチームが良い成績をおさめるかとか、すぐにわかつたんですね。それがとても客観的だった。現役時代には、自分の練習のことしか意識がなかつたから……。客観的に周囲を見るってことも本当は大事だったのかもかもしれませんけど……。」

不思議な感覚だったに違いない。

「引退」をした選手は必ずこのことを言う。「自分のフィールド」が「後輩のフィールド」になっているという感覚。その感覚を「新鮮」とか「客観的」と表現する人もいれば、「悲しみ」「置いてきぼり」

「孤独感」「虚脱感」と、色々なネガティブな言葉を投げる人もいる。私は、タケちゃんが観客席から見ている姿を横で見れていたが、その時、思ったことは「あ、タケちゃんは、スムーズなトランジションをしているな」だった。彼女の表情でそう感じた。

「選手としてではなく、観客席から見て、『なぜ私はここにいるのだろう』というような未練のようなものはなかったんですね・・・。」
はっきりそう言った。

<井村先生の指導>

先生には、シンクロ以外にも礼儀作法なども教わった。
井村先生のクラブに入ったころは、とにかく、人の練習をよく観察したという。「自分の練習をしなさい」といわれることもあったそうだ。

「最初は、先生から怒られても、意図することが分からなかったんです。なぜ怒られるのか。でも、それを理解できるようになってからは、後輩にもいろいろアドバイスをできるようになりました。後輩たちが、先生の意図を理解できず、それを態度に表しているときは、注意もしました。なぜなら自分も同じ道を歩んできたので、手に取るように後輩たちの気持ちがわかるからです。なぜ先生が厳しいのか、怒るのか・・・それが理解できるから、どんなに厳しくされてもそれには意味があるということを説明しました。コーチからの厳しい指導は、それをどう受け取るかが肝だと思います。それがわからないとやらされているだけの感覚になりますから。」

タケちゃんは厳しい、「厳しくしてくれる」指導者に巡り会えて、本当に幸運だったはずだ。

<今後について>

「テレビに出るときなど、メダリストという肩書きはもういらぬ。それより、これから自分を磨いて、新しい肩書きをつかみとるようにしたい。あまり肩書きに未練はありません。」

この思考になるまでには、タケちゃんにも葛藤があった。不安もあった。でもこの言葉が本当に出てきてからは、タケちゃん自身の過去の選択にも良い意味づけをしているのだろうと思った。

「引退後、周囲から何がしたいの？と言われることも多いと思うんですけど？」
私は最後の質問をした。

「一時は、周囲から言われれば言われるほど、自分の選択が間違っているのか不安になってきたこともありましたけど、今は一年前に比べて落ち着いていますね。どんな形かわかりませんが、『表現者』ということでどんどん変化していきたいと思っています。」

引退した選手のよくあるケースとして、「選手というわかりやすい肩書きをなくしたとたんに自分を説明する言葉がなくなった気がして、不安になる」ということがある。

選手というアイデンティティーを消失することは苦しいことだ。「消失した」と認知することが厳しいのだ。当然、これには個人差がある。一般的には、現役時代に選手という肩書きに固執しているかどうかポイントであると言われている。だから、選手以外の自分を現役時代に作っておくことが重要だとも。

しかし、これだけでトランジションがスムーズにいくかどうかは決まらない。そもそもトランジションがスムーズである必要もない。しかし、できれば「良い悩みを続ける」スムーズなトランジションを選手にはしてもらいたいと願っている。だから、タケちゃんにも、この1年間、故意に悩んでもらったこともあったが、極力、役立つようなことは助言をし、「少しずつ悩めるように」した気もする。

トランジションをスムーズにすると、悩まなくなってしまうのではないか、という危惧もある。確かにそうだ。しかし、引退後のあの「きつき」は、やはり、ほんの少しは和らいだ形で「経験」してもらいたいと思う。インフルエンザだって、予防注射を打ってからだって発症するときつい。そして予防接種をしないで発症すると死ぬことだってある。引退の苦悩だって一緒だ。

タケちゃんのステキなトランジションを目の当たりにして、とても嬉しかった。まだまだトランジションを何度も繰り返しながら、そして、その都度、彼女はその失敗や成功をより大きな成功に導くための糧にしながら自己研鑽していくのだな、と実感した。

(田中ウルヴェ京)

— 武田美保氏 プロフィール

1976年 京都府出身

5歳から水泳の名門、京都踏水会にて水泳を始める。7歳から同会のシンクロコースに入門。13歳の時に、井村シンクロクラブに移籍。

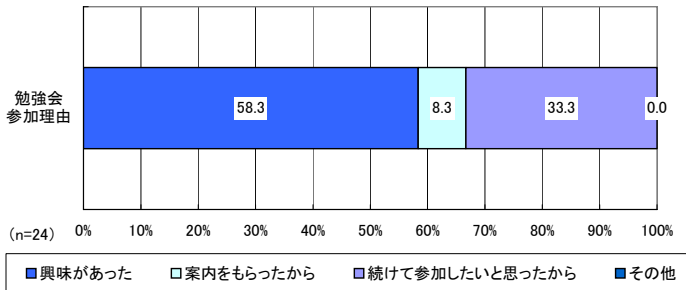
13歳でジュニアの日本代表に入る。17歳でナショナルA代表入り、1997年より立花美哉選手とデュエットを組み、その後日本選手権7連覇を果たした。アトランタオリンピック、シドニーオリンピック、アテネオリンピックの3つのオリンピックで、銀・銅・合わせて五つのメダルを獲得。(日本人個人が持つメダル数ではデュエットパートナー・立花美哉とならび、歴代1位)

アテネオリンピックを期に引退。引退後は表現の道をさらに高めるべくラスベガスへ短期留学。柔軟性を高めるためにネバダ州立大学ダンス学部発行のピラティスイストラクターの公認資格も取得した。2005年、日本オリンピック委員会デラン・アンバサダーに選ばれるほか、ミズノ「スピード・アクアライフアドバイザー」、味の素・アミノバイタルのCM契約ほか、企業の広告にも登場予定。

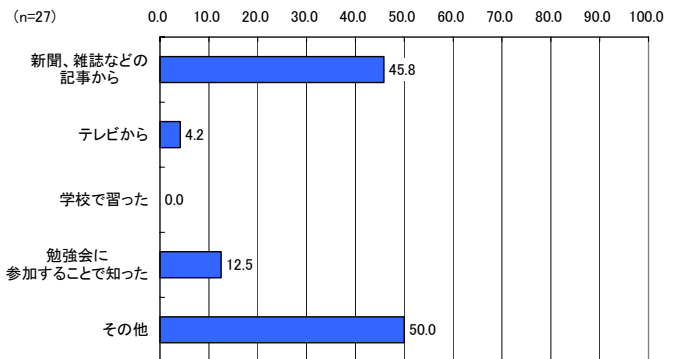
2. 第11回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数：36

1. 勉強会参加理由



2. 興味、関心について



3. 勉強会はどうだったか。

- 井村コーチの話を聞いたことがあるので、やらされている選手の武田さんとはどうだったんだろうと思っていました。でも、やらされているわけではなかったんですね。武田さんは、あえて「トランジション」になかったような・・・スタンスが同じこと、内面的なところ、それが大切ですね。
- とても勉強になりました。今後、いろいろ考えていく上でヒントをたくさんいただきました。ありがとうございました。
- 単なる経験談ではなく、心の芯にふれたお話が多く、とても共感できました。武田さんの自分をとらえる能力の高さに驚いています。重野さん、田中さんの質問がそれを引き出したのですね。三人のスピーカーにとっても感謝しております。
- 話の内容は興味深いものばかりであったが、引退後一年間の話をもっと聞きたかった。
- 武田さんのお話は非常に勉強になりました。私は指導者という立場であるので、井村コーチのお話、外的動機に目を向けるのではなく、自分自身に目を向ける内的動機付けのお話は非常におもしろく感じました。また、参加したいと思います。
- 非常に自分にとってタメになるお話をありがとうございました。初めて武田さんのお話を聞きましたが、一流選手の心というものを理解できたような気がします。
- とても楽しくお話を聞くことができました。貴重なお話ありがとうございました。現在の私は中高生等スポーツ選手にPSTの指導をしています。今回はとても勉強になりました。
- 今後の仕事、人生にとって非常に参考になり、一つ一つの考え方、とらえ方など勉強になりました。
- とても楽しい時間を過ごすことができました。今後も機会があったら来て勉強したいと思いました。もう少し質問の時間をとってほしかったです。
- 自分の考えとはまったく違う高い意識をもち、明確な目標をたてて競技に臨んでいたと思った。そして、競技を辞めた後も物事一つ一つを楽しむ、ポジティブに考えることができることに尊敬した。自分も見習う部分が多いと思った。
- 今日初めての参加でしたが、とても有意義な時間を過ごすことができた。武田さんの人間性、物事に対する考え方はとても勉強になりました。
- すごく面白かった。人生の目標設定、イメージ化する力。武田さんの言語能力の高さがイメージ化につながっていると感じました。
- 競技の特性上もあるのかもしれませんが、相手に同調させることを意識しながら自分の理想のイメージを強く思い描かれて生きてこられたことが、これからの人生をプラスにさせていくのだと感じました。周囲からのプラスのイメージ、プラスのストロークの大切さを感じました。
- 選手自身の子供の頃から現在までの「意識」について話が聞けて、非常に参考になりました。自分自身が提供しているサービスに通じる場所や共感するところがたくさんあり自信につながりました。
- 他者と競わない、自分の内とお話しし続けている。若い頃からできていたようで、すばらしいと感じました。僕がそのことに気づき、トレーニングして身につけることができるようになったのは30代も半ばでした。
- 個人として、シンクロというある種パートナーとの距離が特殊な競技にあって、武田さんと立花さんの距離感や、立花さんへの想いに興味がありました。また、トップアスリートの競技と恋愛のあり方も今後聞いてみたい点です。
- 武田さんのお話、すごく共感できました。競技者として成し遂げた結果はもちろん違いますが、武田さんが競技生活で学んだであろう気持ちの持ちよう、努力の仕方、自己分析能力等、私も身につけてこれた自信があります。ちょうど競技者のときと今のスパンの違いに悩んでいた時期だったので、ま

た明日から頑張れそうです。毎回貴重な体験をありがとうございます。

- 自己実現、自己分析など印象的な言葉が多く、とても有意義でした。
- トップアスリートのメンタル面が知れて、とても有意義でした。
- 初めての参加（勉強会）でしたが面白かったです。分野はさまざまでもひとつの道を歩んでこられた方の生の声、そして今後の姿勢をお聞きできて良かったです。
- 常にご自分のことを分析し続けて話し慣れている方のトランジション期間（モラトリアム）中の話がお伺いできてとても良かったです。このようにモラトリアム中の自分をうまく話せる人は、なかなかいらっしゃらないと思うので。
- トップアスリートの考え方がよく分かって有意義でした。
- 武田さんはアーティストになりたいのだと思いました。私はビジネスマンなので、イベントやスポンサーなどで力をかせるスポーツビジネスマンになりたい。
- 完璧！理想的モデル。他の競技者のロールモデルになりえますね。もちろん、キッズアスリートからが大事ですが。
- 武田さんの競技に対してのレベル感はずばらしいと考えます。自身の意思を
- 武田さんの心の持ち方（アスリートの内面）を知ることができて貴重だった。
- 自分も昨年からは新しいスポーツを始め、イメージ、自己分析の重要さというのは大変参考になりました。一言：ずばらしい人です。
- アテネの心境や根幹の部分がとても参考になりました。
- 多くの選手に何のために競技をやっているのか、自分は何者かを考えるヒントを与えるように心がけています。選手は自分の協議しか見えないパターンが多い為、いろいろな刺激を与えて「気付き」を持ってもらえるようにしています。
- キャリアトランジションということより、武田さんのアスリートとしての考え方が非常に勉強になった。子供の頃から自己分析をしていたことに驚いた。
- 現役にごく近いアスリートの生の声が聞けてリアリティを感じた。現役にアスリートがどういう発想、ものの考え方をするのが理解できた。そのことを体系化することでセカンドキャリアに生かせる能力が明らかになる気がする。そういう意味でロゴスで表現できるアスリートが今後必要かも。
- key word：正真正銘自分に納得する、自分に納得する
- 非常に興味深いものでした。おもしろいだけじゃない、生きることそのものについてが、テーマだったようにも感じます。（少しオーバーかもしれませんが）満足度 200%です。
- 聞きやすく、楽しいトークを聞くことができました。
- 毎回、いろいろ感銘を受けますが、今回は特に武田さんの人柄に惹かれました。「素の魅力」

4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- アスリートとしての「スポーツキャリア」に満足する。納得することが大切なんだと改めて感じました。
- あちらこちらで、様々な取り組み、アプローチがされていますが、バラバラで実質的に前に進んでいない気がします。ケーススタディの積み重ねもいいのですが、必要なのは実際に何をどうすればいいか、どれだけ多くの選手にポジティブな影響を与えられるかでしょう。そのための、つまり月例を意識した研究や実践が十分必要だと思います。
- セカンドキャリアにはついては、そういったものがあること事態を認識している選手が少ないように思える。今回の武田選手にトランジションがない如く、トランジションできるのは全く稀有の例といえるのではないかと。通常はトランジションに苦しむ選手が多だろうから。
- 会社などもでき、取り組みは始まっていると思いますが、一般的広がり、理解としてはまだまだだと感じます。
- 私は体育大出身であるが、卒業後の進路が狭いと感じた。自分が思うよりも、周りに「体育大生」というイメージが強くあり、勝手なイメージがつけられている。自分はこれができますという明確なものを現役時代につくっておく必要が選手自身にあると思う。
- 武田さんのようなプラス思考の方は必要ないかもしれませんが、そのようでない人は、たくさんいると思うので、たくさん支援する必要があると思います。
- 認知度は低いと感じられます。普及活動がとても重要だと思います。
- 私の見た中では聞いたことがなかった。
- 学会でこのようなものがあることを初めて知ったレベルで、自分が競技を行っていたときには全く知らなかったの、あまりにまだ広がっていないのかなあということを感じた。
- もともと、アスリートの方が選手時代の経験をもっと生かしてその後も別のステージでどんどん活躍してほしいです。
- キャリア支援をする人材を育てることを目的としている学部には所属しているのですが、そこではニート・フリーター・リストラ・退職といった面からしか見ておりません。しかし、スポーツ選手というのも過去を見る限り多くの困難を乗り越えながらトランジションしていく人ばかりです。社会問題とうまくリンクして、教育機関も考えてほしいと思っています。
- 一般企業においては、全く認知、認識すらされてなく、まだまだ時間がかかるような状態だと思いま

- す。
- 遅れているが、少しずつキャリアトランジションが動き始めている。専門の会社やメンタルトレーニングなど。
- 「セカンドキャリア支援」という言葉を初めて知ったので、まだまだ発展途中なのでは……。でも、その必要性は肌で感じました。その想いを私なりに大切にしていきたいです。
- 私は学生で、今までスポーツの世界の中でだけで生きてきて、スポーツの世界以外でこれからどう生きていけばいいのか迷う友人がたくさんいます。個人的に思うのは、幼少の頃から常に大きな世界（スポーツ以外の世界）を意識させることが、必要な状況にあると考えます。
- 選手まかせなので、よく考えている人だけがキャリアトランジションをうまくやっていると考えています。体系化が必要だと思います。
- 支援はないといって良い。（右記を除いて）Jリーグのキャリアサポートセンターが先行し、努力している。プロ野球OBクラブの支援。そのほか、人材紹介会社が数社、この分野での積極、支援を決めた状況。
- 底辺レベルでの普及がまったくない状態ですが、早くサポートする企業が出現し、セカンドキャリア支援ビジネスを立ち上げるべきだと考えます。
- 少しずつ協会などの活動が見えてきている。
- 学生から見た立場だと、Jリーグやプロ選手のセカンドキャリア支援は少しずつ行われてきたと思うが、アマチュアのスポーツ選手のセカンドキャリア支援はまだこれからだと思う。本当は、アマチュアのスポーツ選手のセカンドキャリア支援が発達しなければならないと思う。
- 企業、学校、官公庁などで雇われている人以外はほとんど支援がないのでは？
- まだまだだと思います。もっと彼らが、活躍できる場所があつてしかるべきだと思う。（特に教育の現場などで）
- JリーグやJOCでの支援プログラムの成果に興味がありますが、個人的にはアスリートの出身地等がもっと支援して、講演会やスポーツ教室等をやれる機会を意図的につくれば良いと思います。
- 充分ではないと思いますが、支援の前に選手自身が「自分のキャリアは常に自分で責任をもつもの」との意識するというか、自立した考えをもつことも必要かと思います。もちろん、自然にそれができている方もいらっしゃると思いますが。

5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- トランジションに模索している選手に話を聞いてもおもしろいかも。
- また、世界のトップで活躍した方のお話を聞きたいです。
- キャリアデザイン、キャリアドリフトなどPSTとの組み合わせやそれに近いスキルのなものについて学んでみたいと考えます。
- ゲストのお話はとても楽しかった。
- 今回のように実際に世界トップレベルの選手の話は学びと取れることが多くあると感じたので、これからは行ってほしいと思った。
- 私たちは、コミュニケーション心理学の専門家として選手にかかわっていますが、その視点から皆さんのお役にたてることがありましたら喜んでご協力いたします。
- 長年にわたり、何度もトランジションを行ってきても尚、いろいろなことと葛藤している年配の元スポーツ選手の人生にも興味があります。また、スポーツ選手対象の人材派遣業を事業として行っている会社の方のお話も聞いてみたいです。
- トップアスリートやチーム立ち上げの成功者の話を聞きたい。
- 現役選手の取り組み
- トップ選手と直接意見交換をしたい。仕事で選手代理人および人材紹介のエージェントをしており、きっと役に立てると思います。
- 海外の例を紹介してほしい。
- アスリートがセカンドキャリアで必要な、またはアスリートとしての活動の中で得られる職能は何か？それをどのように身につけるか。
- カウンセラーから見たアスリート分析。
- 本日、ご両親のお話がおもしろかったので、その観点でおもしろいお話が聞ける方。
- コーピングトレーナーになりたい人のための勉強会。（特にスポーツ選手像）

6. ご意見

- 現役ゆえの「キャリア」「人生」への意識が大切だと思います。
- このような勉強会は非常に有意義だと思う。また、無料なのは偉大かつ寛容です。
- 大学などで、学生向けにも講演を行う。まず、広く認知してもらい、やわらかい頭からのアイデアも取り入れてはいかがでしょうか？
- 現在、メンタルトレーニングの研究会で、東海大、青山学院大、静岡県にて行われるものがあるので、そこで今回のことを紹介してみたいと考えています。

- 今回初めてで、まだキャリアトランジションについては分からないのですが、最初に簡単にどのようなものか説明していただけると分かりやすいと思います。
- 選手と専門家（サポートできる人）をつなぐような役割を期待します。
- アスリートのみならず、学業より競技に力を入れて学生生活を送る人間にも同じようなことがいえると思います。例えば、スポーツ推薦を行っているような学校に対して、田中さんのようなセカンドキャリアに対し考えておられる方の話が役に立つものと考えます。
- アスリート選手の中にもポピュラーな競技とマイナーな競技とでは、セカンドキャリアを考える上で、周りも本人も気持ちの持ちようが全く違うように思います。しかし、問題は自身の気持ちの充実であるということさえ分かれば、同じなのではと思いました。そこを小さなときから伸ばしてあげられればと思います。
- 情報の配信
- 就職支援
- 西野さん、武田さん、あるいは現役の為末さんなどが積極的に呼びかけてほしい。
- 三谷さん、イガヤさんのように、スポーツ選手出身の経営者をもっと世間に知らせ、認知を高めるとよいと思います。投資して、マーケティングはできませんが、営業は日々しており、現在も元プロバスケ選手を手がけています。
- サポート企業と組んで、定期的にセミナー開催がなされるとよい。
- 啓蒙活動がもっと必要だと思います。
- キャリアトランジションの中身も知りたいが、現状のキャリア支援の実施状況も気になります。アスリート以外のキャリアトランジション。
- 様々な競技同士の意見交換。異種目交流会。
- アマチュアのスポーツ選手プロになれなかったスポーツ選手のセカンドキャリア支援を発達させていけば、日本全体でアスリートのセカンドキャリアが充実してくると思う。
- うまく言えませんが、キャリアの部分だけでなく、例えば生活、趣味、健康など、ほかの部分についての問題をスポーツ選手の方が感じていらっしゃるのことがあるのであれば知りたい。
- 企業の方をよんで、セカンドキャリア支援について企業例の意見を聞けるようなディスカッションがあるとよいと思います。

2005年9月29日 勉強会参加者（順不同・敬称略）

浅川未央	朝野公平	案野裕行	五十嵐久美子	池田智嘉	石黒雅広
石川晴美	江口桃子	大儀見浩介	小野田実	影井宏秋	片岡善樹
かわはらゆうこ	久保田健太	久保悠也	久米豊	栗原秀文	小林智香
小林美由紀	小山圭介	木幡日出男	近藤優美子	坂井英仁	佐藤剛
実野善夫	篠原秀人	島田由幸	しみずのりお	下井尚武	関岡智美
高橋裕幸	但野秀信	田中響子	田畑則子	萩折一夫	浜野憲一
三木ひろみ	八鍬美由紀	李成俊	不明ほか8名		

次回勉強会スケジュール

第12回勉強会
2005年11月18日(金) 19:00~20:30

「アスリートのキャリアトランジション 研究者の立場から」

ゲスト: 豊田則成氏

場所: ミズノエスポーツ

事務局: 有限会社MJコンテス

東京都港区白金 1-1-15-3F

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子・柏浦美樹

野村麻衣

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。